



竹取物語

かぐや姫のおひたち

光る竹から生まれた少女

原文（読み仮名付き）・品詞分解・重要古語／文法・一文ごとの現代語訳

古文が苦手な方にも読みやすいように、難しい語には読みを添え、文法事項は必要な部分にしぼって丁寧に解説しています。印刷して学習・授業準備・家庭学習にご活用ください。

このPDFの使い方

このPDFは、竹取物語の冒頭「今は昔、竹取の翁といふものありけり」から「いと幼ければ籠に入れて養ふ」までを扱います。

各文を、 原文（読み仮名付き） 品詞分解 重要単語・重要文法 現代語訳の順に整理しました。まず現代語訳を読んで内容をつかみ、その後で品詞分解と文法を確認すると、古文が読みやすくなります。

学習範囲の原文

今は昔、竹取の翁（おきな）といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬（よろ）づの事に使ひけり。名をば讃岐造（さぬきのみやつこ）麿（まろ）となむいひける。

その竹の中に、本（もと）光る竹なむ一筋（ひとすぢ）ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒（つつ）の中光りたり。それを見れば、三寸（さんずん）ばかりなる人、いと美（うつく）しうて居たり。

翁言ふやう、「われ朝夕毎（あさゆふごと）に見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給（たま）ふべき人なめり」とて、手に打入（うちい）れて家に持ちて来（き）ぬ。妻の嫗（おうな）に預けて養はず。美（うつく）しきこと限りなし。いと幼（をさな）ければ籠（かご）に入れて養ふ。



光る竹の中に、小さな少女がいるという場面が、物語全体の神秘性を生み出します。

一文ずつ丁寧に読む

文1

原文（読み仮名付き）

今は昔、竹取（たけとり）の翁（おきな）といふものありけり。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
今は昔	連語。物語の冒頭表現。	今となっては昔のことだが。
竹取の翁	名詞句。	竹を取る老人。
と	格助詞。	「～と」。
いふ	動詞「いふ」八行四段活用・連体形。	いう。
もの	名詞。	者。
あり	ラ変動詞「あり」連用形。	いる、存在する。
けり	助動詞「けり」過去・終止形。	～た、～だった。

重要単語・重要文法

- ・「今は昔」は、現代の「むかしむかし」に近い導入表現です。読者を物語世界へ入れる働きがあります。
- ・「けり」は物語の冒頭でよく使われ、過去の出来事を語る雰囲気を作ります。

現代語訳

今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

文2

原文（読み仮名付き）

野山（のやま）にまじりて、竹を取りつゝ、萬（よろ）づの事に使ひけり。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
野山	名詞。	野や山。
に	格助詞。	場所を表す。「～に」「～で」。
まじり	動詞「まじる」ラ行四段活用・連用形。	分け入る、入り交じる。
て	接続助詞。	～て。
竹	名詞。	竹。
を	格助詞。	目的語を表す。
取り	動詞「取る」ラ行四段活用・連用形。	取る。
つゝ	接続助詞。	～しながら、くり返し～して。
萬づ	名詞。	さまざま、いろいろ。
の	格助詞。	連体修飾を表す。
事	名詞。	こと、用途。

語句	品詞・文法	意味・解説
に	格助詞。	用途を表す。「～に」。
使ひ	動詞「使ふ」八行四段活用・連用形。	使う。
けり	助動詞「けり」過去・終止形。	～た。

重要単語・重要文法

- ・「つゝ」は動作の反復・継続を表します。ここでは「竹を取っては」のように訳すと自然です。
- ・「萬づ」は「万」の字を使いますが、ここでは数量ではなく「いろいろな」という意味です。

現代語訳

翁は野や山に分け入って、竹を取っては、さまざまなことに使っていた。

文3

原文（読み仮名付き）

名をば讃岐造（さぬきのみやつこ）磨（まる）となむいひける。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
名	名詞。	名前。
を	格助詞。	目的語を表す。
ば	係助詞。	取り立て。「～は」。
讃岐造磨	固有名詞。	竹取の翁の名前。
と	格助詞。	引用・呼称を表す。「～と」。
なむ	係助詞。強調。	係り結びを起こす。
いひ	動詞「いふ」八行四段活用・連用形。	いう。
ける	助動詞「けり」過去・連体形。	～た。係り結びで連体形。

重要単語・重要文法

- ・「讃岐造磨」は「讃岐造（さぬきのみやつこ）+ 磨（まる）」と分けると読みやすくなります。
- ・「なむ」があるため、文末が「けり」ではなく連体形の「ける」になっています。これを係り結びといいます。

現代語訳

名前を讃岐造磨といった。

文4

原文（読み仮名付き）

その竹の中に、本（もと）光る竹なむ一筋（ひとすぢ）ありける。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
その	連体詞。	その。
竹	名詞。	竹。
の	格助詞。	連体修飾。
中	名詞。	中。
に	格助詞。	存在する場所を表す。
本	名詞。	根もと。
光る	動詞「光る」ラ行四段活用・連体形。	光っている。
竹	名詞。	竹。
なむ	係助詞。強調。	係り結びを起こす。
一筋	名詞。	一本。
あり	ラ変動詞「あり」連用形。	ある。
ける	助動詞「けり」過去・連体形。	～た。係り結びで連体形。

重要単語・重要文法

- ・「本」はここでは「本体」ではなく「根もと」の意味です。
- ・「本光る竹」は「根もとが光っている竹」と訳します。
- ・ここにも「なむ～ける」の係り結びがあります。

現代語訳

その竹の中に、根もとが光っている竹が一本あった。

文5

原文（読み仮名付き）

あやしがりて寄りて見るに、筒（つつ）の中光りたり。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
あやしがり	動詞「あやしがる」ラ行四段活用・連用形。	不思議に思う。
て	接続助詞。	～て。
寄り	動詞「寄る」ラ行四段活用・連用形。	近寄る。
て	接続助詞。	～て。
見る	動詞「見る」上一段活用・連体形。	見る。
に	接続助詞。	～と、～ところ。
筒	名詞。	竹の筒。

語句	品詞・文法	意味・解説
の	格助詞。	連体修飾。
中	名詞。	中。
光り	動詞「光る」ラ行四段活用・連用形。	光る。
たり	助動詞「たり」存続・終止形。	~ている。

重要単語・重要文法

- ・「見るに」は「見ると」「見たところ」と訳します。
- ・「たり」は完了・存続の助動詞です。ここでは「光っていた」という存続の意味です。

現代語訳

不思議に思って近寄って見ると、竹の筒の中が光っていた。

文6

原文（読み仮名付き）

それを見れば、三寸（さんずん）ばかりなる人、いと美（うつく）しうて居たり。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
それ	代名詞。	それ。
を	格助詞。	目的語を表す。
見れ	動詞「見る」上一段活用・已然形。	見る。
ば	接続助詞。	~すると、~ので。
三寸ばかり	名詞句。	三寸ほど。約9センチほど。
なる	助動詞「なり」断定・連体形。	~である。
人	名詞。	人。
いと	副詞。	とても。
美しう	形容詞「美し」シク活用・連用形のウ音便。	かわいらしく。
て	接続助詞。	~て。
居	動詞「居る」ワ行上一段活用・連用形。	座る、いる。
たり	助動詞「たり」存続・終止形。	~ている。

重要単語・重要文法

- ・「已然形+ば」は、ここでは「~すると」と訳します。
- ・古文の「美し」は、現代語の「美しい」よりも「かわいらしい」「愛らしい」の意味が中心です。
- ・「三寸」は約9センチほどです。竹の中にいる小さな存在として描かれています。

現代語訳

それを見ると、三寸ほどの人が、とてもかわいらしい様子で座っていた。

文7

原文（読み仮名付き）

翁（おきな）言ふやう、「われ朝夕毎（あさゆふごと）に見る竹の中に、おはするにて知りぬ。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
翁	名詞。	老人。ここでは竹取の翁。
言ふ	動詞「言ふ」八行四段活用・連体形。	言う。
やう	名詞。	様子、こと。
われ	代名詞。	私。
朝夕毎に	副詞句。	朝夕ごとに、いつも。
見る	動詞「見る」上一段活用・連体形。	見る。
竹	名詞。	竹。
の	格助詞。	連体修飾。
中	名詞。	中。
に	格助詞。	場所を表す。
おはする	尊敬語の動詞。	いらっしゃる。
にて	連語。	～で、～によって。
知り	動詞「知る」ラ行四段活用・連用形。	分かる。
ぬ	助動詞「ぬ」完了・終止形。	～た、～てしまった。

重要単語・重要文法

- ・「おはする」は尊敬語です。小さな少女を尊い存在として扱っていることが分かります。
- ・「知りぬ」の「ぬ」は完了の助動詞で、「分かった」と訳します。

現代語訳

翁が言うことには、「私が朝夕いつも見ている竹の中にいらっしゃることで分かった。

文8

原文（読み仮名付き）

子になり給（たま）ふべき人なめり」とて、手に打入（うちい）れて家に持ちて来（き）ぬ。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
子	名詞。	子ども。
に	格助詞。	結果を表す。「～に」。
なり	動詞「なる」ラ行四段活用・連用形。	なる。
給ふ	補助動詞・尊敬。	～なさる。
べき	助動詞「べし」当然・連体形。	～はずの。
人	名詞。	人。

語句	品詞・文法	意味・解説
な	助動詞「なり」の撥音便無表記。	～である。
めり	助動詞「めり」推定・終止形。	～ようだ。
とて	格助詞＋接続助詞。	～と言って。
手	名詞。	手。
に	格助詞。	～に。
打入れ	動詞「打入る」ラ行下二段活用・連用形。	入れる。
て	接続助詞。	～て。
家	名詞。	家。
に	格助詞。	方向・到達点。
持ち	動詞「持つ」タ行四段活用・連用形。	持つ。
て	接続助詞。	～て。
来	カ変動詞「来」連用形。	来る。
ぬ	助動詞「ぬ」完了・終止形。	～た。

重要単語・重要文法

- ・「給ふ」は尊敬の補助動詞です。翁が少女を敬っていることが分かります。
- ・「なめり」は「なるめり」が縮まった形です。「～であるようだ」と訳します。
- ・「べき」はここでは当然の意味で、「～はずの」と考えると自然です。

現代語訳

この方は、私の子におなりになるはずの方のようだ」と言って、手の中に入れて家に持って帰った。

文9

原文（読み仮名付き）

妻の嫗（おうな）に預けて養はす。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
妻	名詞。	妻。
の	格助詞。	連体修飾。
嫗	名詞。	老女、老婆。
に	格助詞。	相手・対象を表す。
預け	動詞「預く」力行下二段活用・連用形。	預ける。
て	接続助詞。	～て。
養は	動詞「養ふ」八行四段活用・未然形。	養う、育てる。
す	助動詞「す」使役・終止形。	～させる。

重要単語・重要文法

- ・「嫗」は「おうな」と読み、年を取った女性を表します。男性の老人は「翁（おきな）」です。
- ・「養はす」は「養ふ」+使役の助動詞「す」で、「育てさせる」と訳します。

現代語訳

妻の嫗に預けて、育てさせた。

文10

原文（読み仮名付き）

美（うつく）しきこと限りなし。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
美しき	形容詞「美し」シク活用・連体形。	かわいらしい。
こと	名詞。	こと。
限り	名詞。	限度。
なし	形容詞「なし」ク活用・終止形。	ない。

重要単語・重要文法

- ・「限りなし」は「限度がない」から、「この上ない」「非常にすばらしい」という意味になります。
- ・ここでも「美し」は「かわいらしい」と訳するのが自然です。

現代語訳

かわいらしいことは、このうえなかった。

文11

原文（読み仮名付き）

いと幼（をさな）ければ籠（かご）に入れて養ふ。

品詞分解

語句	品詞・文法	意味・解説
いと	副詞。	とても。
幼けれ	形容詞「幼し」ク活用・已然形。	幼い。
ば	接続助詞。	～ので。
籠	名詞。	かご。
に	格助詞。	場所・方向。
入れ	動詞「入る」ラ行下二段活用・連用形。	入れる。
て	接続助詞。	～て。
養ふ	動詞「養ふ」八行四段活用・終止形。	育てる。

重要単語・重要文法

- ・「已然形＋ば」は原因・理由を表すことがあります。ここでは「幼いので」と訳します。
- ・小さなかくや姫を籠に入れて育てた、という描写により、彼女の小ささが強調されています。

現代語訳

とても幼かったので、籠に入れて育てた。

重要単語・文法まとめ

重要単語

語句	読み	意味・注意点
今は昔	いまはむかし	物語の冒頭表現。「今となっては昔のことだが」。
翁	おきな	年を取った男性。竹取の翁を指す。
嫗	おうな	年を取った女性。翁の妻。
讃岐造磨	さぬきのみやつこまる	竹取の翁の名前。
萬づ	よろづ	さまざま。いろいろ。
本	もと	根もと。ここでは竹の根もと。
あやし	あやし	不思議だ、変だ。
三寸ばかり	さんずんばかり	三寸ほど。約9cmほど。
美し	うつくし	かわいらしい、愛らしい。現代語の「美しい」とずれやすい。
おはする	おはする	「いる」の尊敬語。いらっしゃる。
限りなし	かぎりなし	この上ない。非常にすばらしい。

重要文法

文法事項	例	解説
けり	ありけり・使ひけり	過去・詠嘆の助動詞。物語の冒頭では過去の出来事を語る働き。
つゝ	竹を取りつゝ	動作の反復・継続。「～しながら」「～しては」。
なむ～ける	となむいひける	係助詞「なむ」による係り結び。文末が連体形になる。
たり	光りたり・居たり	完了・存続の助動詞。ここでは「～ている」という存続。
已然形+ば	見れば・幼ければ	「～すると」または「～ので」。文脈で判断する。
なめり	人なめり	「なるめり」の縮約。「～であるようだ」。



翁は、光る竹の中の少女を授かりもののように受け止め、家へ連れ帰ります。

まとめ

今回の場面では、竹を取って暮らしていた翁が、根もとが光る竹を見つけ、その中に小さな少女を発見します。翁はその少女を特別な存在として受け止め、自分の子になる人だと考えて家に持ち帰ります。

この少女が、のちのかぐや姫です。日常の中に突然、光り輝く非日常が現れるところに、竹取物語の大きな魅力があります。

確認ポイント	内容
物語の始まり	「今は昔」によって、読者は昔の物語世界へ導かれる。
翁の人物像	野山で竹を取って暮らす素朴な老人。
光る竹	非日常への入口。かぐや姫の神秘性を象徴する。
かぐや姫の描写	三寸ほどで、いと美しく居たり。小さく愛らしい存在。
翁の受け止め方	「おはする」「給ふ」など尊敬語を使い、尊い存在として扱う。
重要文法	けり・なむ・たり・なめり・已然形 + ばを確認。

次の学習へ

今回は、翁がかぐや姫を見つけた後、竹の中から黄金を見つけるようになり、かぐや姫がすくすく成長していく場面を読みます。